

時代に反逆した女

—Charlotte Brontë の *Jane Eyre*—

吉田 尚子

1. 19世紀におけるイギリスの女性の理想像

イギリスでは18世紀前半から19世紀にかけて産業革命がおこり、他国より先駆けていち早く工業が発展し、19世紀にはいわばイギリスは「世界の工場」になった。それに伴って社会が大きく変動した時代であり、産業革命の結果、工業、商業、貿易の発展、都市への人口の集中が起こり、商工業によってもたらされた富はいわゆる新興市民階級の人びとが手にし、彼らは中流上層階級にのし上がっていった。中流階級といってもさまざまであったが、この時代は工業、商業、金融業に携わるいわゆるブルジョア階級がこの時代の中核をなした。経済力を握った新興市民階級が社会の中核を担うと、体面へのこだわり、上品な道徳主義的偏見などに特徴づけられる「ヴィクトリアニズム」という時代精神をもたらした。そしてヴィクトリア朝のイギリスにおいては時代の中核となった中流階級の女性の生き方に変化が生じたのだった。男性とともに過酷な労働に明け暮れていた下層階級の女性や多くの富のある貴族などの上層階級の女性たちとは違って、中流階級の女性は男性とは生活領域が別の生き方をしなければならなかった。というのは産業革命によって従来の家庭内産業は駆逐され、機械の発明や技術の発達、仕事の専門化、工場の設立などで、男性は社会に出て仕事をし、女性は従来の仕事から離れて、家庭を守ることが務めになったからである。家庭は夫と妻との共同の仕事の場から、外で働いて疲れて帰ってきた夫が身も心も癒す場になり、妻は夫と子どもの世話がその務めになる。「家庭の天使像」という言葉はそのような女性の果たすべき役割から生まれ、「男性は外に、女性は家庭に」という性別による役割分化が中流階級において

はっきりと決められてしまった。ブルジョア階級がこの時代の精神の中核となり、彼らの生活理念と先に述べた「女の領分」の問題が密接に関わってくると、社会に認められた女性の天職は「結婚」以外ないと一般に思われ、身分が高く、経済力のある男性と結婚することが、女性にとって最高の幸福をもたらすことになった。

さらに生活水準が向上すればするほど、召使や、小間使いが家庭における主婦の肩代わりをするようになる。子どもの養育は乳母や女家庭教師（ガヴァネス）に任せ、妻自らは何もしないで、できるだけ装飾的な存在になるように務めたが、それは何もしないで「遊惰」の生活を送ることが夫の社会的地位のシンボルになったからである。女性の生活は夫の経済的手腕に依存して成り立ち、女性の運命は夫の社会的地位に左右された。「何もしない」のが主婦の理想像になると、19世紀の半ばには妻の理想像は「家庭の天使」から「完全な淑女」へと移っていった。

未婚の若い娘は「完全な淑女」になるためには女性は独自の意見などは持たないように教育を受けたし、また女性が自立心や野心を持つことはすべて良くないこととされた。また、女性の性的感情が発達するのは良くないとされ、これも周りが抑制するようにした。つまり、「完全な淑女」であるためにはまず、体力でも知性でも男性より弱くて、かなわないということを認識し、それに甘んじること、また身のこなしがしとやかで、やさしく、美しい心と精神を持たなければならないこと、自分の独自の意見や自立心は持つてはいけないなどの条件があった。

2. 女性作家としての Charlotte Brontë の苦悩

Charlotte Brontë (1816—1855) が生きた時代から 100 年程前までは女性がものを書くなどということは「身の程を知らぬ」女というレッテルを貼られ、物を書くこと、読むこと、考えることは男性がすることと決めつけられていて、このようなことを女性がすることはとんでもないというのが社会の一般的通念だった。19 世紀になると女性が物を書くことがもはや風変わりなことではなくなり、この時代にはすぐれた女性作家が数多く輩出され、Charlotte Brontë

もそのうちのひとりである。E. Showalter は *A Literature of Their Own* の中で1800年から1820年代に生まれた女性作家を「女性的な」(Feminine)作家の第一世代と呼び¹⁾、Charlotte はこのグループの中に入る。このグループの女性作家はヴィクトリア時代の女性作家の黄金時代と目される女性たちをすべて含んでいる。つまり、ブロンテ姉妹、ギヤスケル夫人、ブラウニング夫人、ジョージ・エリオットなどである。Sandra M. Gilbert と Susan Gubar によれば、特に Charlotte は多くの女性が共有する不安と能力を最も明確に示す例と思われ、彼女の作品を詳細に分析することによって、19世紀の女性作家の作品すべてを解釈する方法を提示できるとしている²⁾。

19世紀になって女性が物を書くことが風変わりではなくなった最初の時代であるといっても、やはり、ヴィクトリア朝の人々の多くは女がペンを取ることを女らしさの規範に背くものであると考えていた。この時代は先に述べたように、女性の理想像が「家庭の天使」または「完全な淑女」とされていた時代だったからである。Charlotte は小さい時から文学が好きで、弟や妹たちと物語や詩を創っていたが、20才の頃になっても文学作品を創りたいという内からの衝動を抑えることが出来ず、一度、桂冠詩人の Robert Southy (1774—1843) に自分の詩を送って助言を求めた。彼から、文学は女性の一生の仕事にはならないので、それよりも女性にふさわしい務めを果たし、名声や野心のために詩を書くことをやめるようにという忠告を受けた。それでも彼女は小説や詩を創りたいという気持ちを抑えることが出来ず、Currer Bell という男性とも女性ともわからないような中性的なペンネームを用いて、初めて世に出した小説が *Jane Eyre* であった。Charlotte が小説を書いた1840年代は作家の仕事が職業として認知されつつあった時代で、この頃の女性作家たちは男性のペンネームを用い始めた。女性が自分の意見を持たないように教えられていた時代に未婚の女性が何かを書くことは偏見の目で見られていたからである。しかし、もっと大きな理由は1847年ごろから1875年まで、一般に男性と女性の作品に、二重基準(ダブルスタンダード)が採用されていたからである。つまり、女性によって書かれた作品だとわかると、批評の基準が下げられ、公平な批評を受けられなかったからである。彼女たちは性別に関係なく、作家として批評してもらいたかったのである³⁾。

このような二重基準が採用されていた時代に、ブロンテ姉妹はみなそれぞれ、性愛や自我、自由、自立など女性が主張することが危険であるとされていたテーマをペンネームを用いて作品の中で著したのである。

3. *Jane Eyre* における幽閉と逃亡

この小説は *Jane Eyre* というヒロインが少女から大人になっていく過程で、いくつもの試練を経て成長していき、最後には愛する男性と結ばれるという物語で、いわゆる教養小説と呼ばれるものである。これは一般にはロマンテックな恋物語とか、ゴシック小説と思われているが、単にそれだけの物語ではなく、多くの意味が含まれている。その中のひとつとして、当時の社会に対する「女性の反乱」のメッセージが込められていて、女性の自由、自立などについての Charlotte の考えが表されている。

この小説では女主人公の生活の場がそのまま小説の重要な舞台を構成し、Jane が行なう主な四つの部分の空間的移動が同時に彼女の精神的発達のステップになっている。彼女が行く所には必ず、男の家父長制の専制君主がいて、行った先は彼女の試練と成長の各段階を暗示する象徴的な地名を持ち、いわば、これはジェインの巡礼の旅をたどった物語と言える。彼女の生活の場はまず、Gateshead「門出」、その後は Lowood「低地の森、物心両面の低さ」、Thornfield「とげのあるバラに満ちた野」、Marsh End「沼地の果て」、Moor House「荒野の避難所」と続き、最後は、Ferndean「しだの谷間、この世から離れた場所」というようにそれぞれ、その名前にはその場所での Jane を取り巻く状況を表わす象徴的な意味が込められている。そしてそれらはいずれも共通のパターンを持ち、彼女を圧倒しようとする外界の力や権威と彼女は戦い、それに打ち勝ち、新しい世界へ旅立つということが四回くり返される。

Jane は孤児として、亡くなった伯父の家の Reed 家に預けられるが、伯母やその子どもたちからはのけ者にされていて、不幸で、孤独な生活を送っている。死んだ伯父の家は Gateshead という所にあるが、この名前は「門口」という意味で、不幸な運命に出会う Jane の生涯の出発点という暗示が込められ

ている。小説の初めて従兄弟の John にいじめられ、怒りのあまり、彼につかみかかったが、その罰に「赤い部屋」に押し込められる場面がある。赤い部屋は伯父がなくなったところであり、小さな Jane は赤い部屋に監禁されて激しい恐怖に襲われる。

The red-room was a spare chamber, very seldom slept in: I might say never, indeed, unless when a chance influx of visitors at Gateshead Hall rendered it necessary to turn to account all the accommodation it contained: yet it was one of the largest and stateliest chambers in the mansion. A bed supported on massive pillars of mahogany, hung with curtains of deep red damask, stood out like a tabernacle in the center, the two large windows, with their blinds always drawn down, were half shrouded in festoons and falls of similar drapery; the carpet was red; the table at the foot of the bed was covered with a crimson cloth; the walls were a soft fawn colour, with a blush of pink in it; the ward-robe, the toilet-table, the chairs, were of darkly-polished old mahogany. Out of these deep surrounding shades rose high, and glared white, the piled-up mattresses and pillows of the bed, spread with a snowy Marseilles counterpane. Scarcely less prominent was an ample cushioned easy-chair near the head of the bed, also white, with a footstool before it, and looking, as I thought, I like a pale throne⁴⁾.

Jane の Reed 夫人に対する激しい怒りが「生き物のようにきらめき、なめつくすように真っ赤に燃えさかるヒースの山」と例えられているように Jane が監禁された赤い部屋の赤は彼女の激しい怒りを表すシンボルになっているが、これはまた情熱 (passion) の激しさとも取れる。さらにこの赤い部屋の描写に使われている色に着目すると、red, crimson, a blush of pink, white, pale というように赤から白への移り変わりに気がつくが、これは Jane の怒りの推移を表わしているとも考えられる。最も激しい怒りの deep red から、怒りが

沈んで white になり、そして pale となって灰になる⁶⁾。さらにこの赤と白の対照については、赤は Jane の激しい感情、白はそれを抑制する理性を表わすことで、彼女の心の中の感情と理性の葛藤を暗示していると考えてもよい⁶⁾。この赤い部屋は Jane が自分の周りの社会に対してどのような気持ちを持っていたかを表わしている。彼女が行く所には必ず家父長的な人物がいるが、ここでは「奴隷の監督」と Jane が呼んだ従兄弟の John がその役割を果たしている。彼女は「反逆を起こした奴隷」の気持ちになって、周りのリード夫人たちに反抗的な態度を示し、怒り出すと感情が抑えられない。そして、ここは伯父の亡くなった部屋、つまり家父長の死の世界であり、彼女は自分の姿を鏡で見たり、一筋の光に恐くなったりして、失神する。彼女はこの耐えられない恐怖と圧迫から逃れる手段を考えるが、それはそこから逃亡するか、絶食して自殺するかだった。結局、彼女は狂気に陥るという形でここから逃亡する。薄闇の中ですうっと動いた光を死の世界からやって来た幻の前ぶれだと思い、胸苦しくなり、息が詰まりそうになってがまんできず、死に物狂いに錠を揺さぶり、一度は部屋から出された。しかし、また監禁されてしまい、最後には失神して気を失ったまま部屋から出される。

この幽閉と脱出がこの作品の中だけでなく、他の女性作家の作品の中でも繰り返し描き出されている。この最初の日 of 出来事が、物語全体を占めている大掛かりなドラマの原型をなして、Jane の巡礼の旅は幽閉と逃亡という赤い部屋の出来事が中心をなすモチーフのさまざまな変形から成り立っていると言える⁷⁾。小説の中で何か決まって決定的な事件が起こるたびに Jane は赤い部屋で経験したことを思い出す。Lowood で Brocklehurst に侮辱された時や Thornfield から脱出しようとした夜、Jane は赤い部屋を思い出したり、夢に見たりする。この赤い部屋の出来事が Jane の社会からの疎外、反逆、幽閉、脱出、狂気というこの小説全体の大きなテーマのドラマとなっている。

Jane は赤い部屋に監禁された後、Reed 夫人に自分の怒りをぶちまけ、激しい言葉をあびせ、公然と反抗したが、女の子は自分の意見を言わないのが美德とされた時代にはこの行為は世間一般からはあるまじき行為とされた。孤児であるというだけで、いじめられる Jane は自分を抑圧する階級制度に対して社会の慣習に背いて、反逆するのであり、これは性差別のみならず、階級社会

に対する反逆でもあった。もうすでにこのとき、Jane は大人の社会に対して、反逆の精神を持っていたのである。

19世紀の女性のほとんどは男性が支配権を持つ「家」に押し込められていた。このような状況のもとで、19世紀の女性作家には幽閉と逃亡のテーマを視点に置いた作品が多く、これがこの時代の女性特有の伝統となり、その場合、「家」を女性の幽閉の象徴として用いた。女性作家たちは自分自身の体験を細かく作品の中に描き、その中に自分自身の姿を重ねようとした。*Jane Eyre* は女性を主人公にした教養小説であることは確かであり、幽閉と逃亡の物語と位置づけられる。ほとんどの女性は家父長制社会においてさまざまな苦難を経験するが、*Jane Eyre* においては、Gateshead では John, Lowood では Brocklehurst, Thornfield では Rochester, Marsh End では St John という「家父長」的専制君主からそれぞれ抑圧を受け、Jane のそれぞれの場所での幽閉、そしてそこからの逃亡というドラマが作品の中で繰り返される。Gateshead では家父長的存在として君臨している従兄弟の John をはじめ、Reed 夫人たちからいじめられる。Thornfield では家庭教師をしている家の主人の Rochester と恋に落ちるが、彼が家父長制の専制君主として Jane を抑圧する。Lowood と Marsh End では宗教の仮面をかぶった二人の家父長的人物によって抑圧を受ける。

この赤い部屋での Jane の監禁、脱出は作家 Charlotte Brontë が社会的に閉じ込められているという感情、そしてそこから脱出したいという精神的逃亡を望む願望を表わしているとも考えられる。

4. *Jane Eyre* における狂気と分身

Jane が赤い部屋に監禁された時、彼女は最後には狂気に陥って、失神してしまったためにそこから脱出したが、狂気に陥ることはその時代の女性に対する抑圧と関係がある。ヴィクトリアニズムと呼ばれた時代精神においては勤勉、道徳的節制を建前とし、真面目と慎みと品位が重んじられるようになった。そして女性には性的情熱や性的欲求をほとんど認めなかった。19世紀半ば以後、女性の精神病患者は男性より多かったが、狂気は女性が多くかかる病気で、

当時の医学ではそれは妊娠、出産、更年期など女性の生殖作用と関連があり、その原因は女性一般の性や情動のコントロール能力が無いことなどとされた⁸⁾。しかし、これは女性が娘、母、妻という立場で家庭内という閉鎖的な場所で限られた役割しか与えられていないことから起こる閉塞感が原因となっていると考えられるようになった。その意味で女性の狂気は抑圧された女性の象徴的な意味合いを持つ。

Jane と Rochester との結婚式の途中で、彼には気の狂った妻 Bertha がいて、Thornfield の館の屋根裏部屋に隠されていることが発覚したので、その結婚は成立しなかった。Rochester によると、Bertha との結婚は自分の意志ではなく、父や兄たちの画策によってはかられた結婚だったので、大酒のみで、淫蕩な女性である Bertha にはすぐ嫌気がさしてしまったが、やがて、彼女は気が狂ったので屋根裏部屋に監禁したということだった。彼女は時々、見張りの目を盗んで屋根裏部屋から抜け出して、放火したり、Jane の目の前に現れたりして、監禁と逃亡を繰り返していたのだった。

しかし、Bertha の狂気は Jane の狂気にも通じる。Jane は Rochester と別れる決心をする時に “I will hold to the principles received by me when I was sane, and not mad—as I am now.” (346) と思ったように自分で気が狂っていたことを認めているし、また、Reed 夫人も Jane が気の狂ったみたいに自分に食ってかかってくると話していた。Bertha が監禁されている屋根裏部屋で、走り回る姿は、少女の時に赤い部屋で狂ったようにドアに走りよって錠を激しく揺さぶった Jane の姿と重なり合う。Bertha は二人の結婚を邪魔する存在としてヒロインの敵で、キャラクターにおいて、Bertha と Jane は対極にあると思われるが、決してそうではない。そのような物語の表層的な意味の裏に深層的な意味が隠されていて、裏の意味がさまざまなシンボルで暗示されている。フェミニズム批評では、Bertha は Jane の分身であり、これは女性作家が作品に投影している狂女の分身という現象と解釈できるので、Bertha の怒りは Jane の側の女性としての怒りと結びついている。Rochester との結婚によって彼に支配されて、従属してしまうのでないかという Jane が抱く心の奥底の不安と怒りが Bertha という Jane の分身によって表わされている。Jane の心の奥深くにある不安、怒り、反逆の感情が Bertha という形で

外に現れたと解釈することが出来るとすれば、Bertha の怒り、笑い声に Jane の深層にある心理が表れているといってよい。Rochester との結婚に対して抱く不安、鏡に映し出された花嫁衣裳とヴェールをつけた別の人間のような自分の姿に対する恐怖感は Bertha の経帷子のような白い衣服を着けた気味悪い姿となって客観化されている。Jane は Rochester が Bertha を憎むのを聞いていて、彼女に同情する。彼女が狂気に陥ったのは Rochester にも原因があると感じ、自分も彼と結婚すると同じ様になるのではないかと危惧する。Jane も Bertha と同じ様に花嫁衣裳のヴェールを引き裂きたかったし、また Rochester を愛する一方で、結婚に対する不安が Jane にあり、Bertha の出現によって、結婚は彼女の希望通りに中止された結果を考えたならば、Bertha のしたことは Jane も実現したいと望んでいたことであるという推論は理解できる。Bertha は Jane の怒れる自己の暗黒の分身で、子どもの頃から抑えてきた激しい怒りの秘密の自我である。Bertha が監禁されていた屋根裏部屋の近くに Jane は何度か迷い込むが、ここは Temple 先生や Helen から学んだ理性の力と Bertha が抱く激しい感情という不合理的な力が交差する地点といっている。

女性作家はヒロインではなく、狂気の女性に際立って激しい反抗を演じさせることによって著者自身の自己矛盾、すなわち家父長制社会に拘束された自分の姿を表現している。従って、その狂女は一般的に見て、ある意味で著者の分身、作者自身の不安と怒りの象徴になっている⁹⁾。分身は女性であるがために課せられた抑圧、苦難、屈辱をヒロイン以上に重く負わされている。Jane は正気を保ちながら、監禁と脱出をくり返して成長を遂げていくが、Bertha は焼死することによってしか脱出できない運命で、Jane が成長を遂げれば舞台から消えていく運命を担わされた分身といっている。

5. Jane Eyre の反ヒロイン的資質

Jane Eyre 以前の小説のヒロインたちは一般的におとなしく、従順で、女らしい女性たちであったが、Jane は平穏な生活に満足するような女性ではなく、「生まれつき落ち着きがない」性格で、一カ所にじっとしていられない

ちであった。彼女は自分を束縛するものから脱出して、常に自由を求めて、外に広がっていかうとした。St John は Jane のことを変化のない静かな平板な生活が出来ない性格であり、じっと穏やかにしていられない激情家だと言う。彼女がじっとしていられない性格であることは Thornfield の平穏な生活に慣れてくるとそこから脱出したいと思うことが何回かあったことからもうかがわれる。そのような性格の彼女は自分を拘束する「監獄」から脱出して行って、精神的な成長を遂げていく。

Jane は John Reed という「家父長」のいた Gateshead から逃れて、Lowood の学校に来るが、ここでも家父長的な人物である Brocklehurst という偽善者にいじめられ、抑圧を受ける。しかし、Temple 先生や Helen たちに助けられて、その苦難を切り抜けて、優秀な成績を修めたために、その教師になることが出来て、満ち足りた平穏な生活を送った。しかし、Temple 先生が結婚して、学校から去っていくと、Jane は心の中に何とも言えない虚無感が沸き起こった。Temple 先生から「調和した思想」や「義務と秩序に忠実」になるということ、つまり自己の感情を抑え、理性で行動することを教えられたが、先生が去ってしまうと、もとの自分が蘇ってきて、心の中に色々な感情が沸き起こってくるのを感じたのである。彼女は従順で静かにしていられる力がなくなったというよりも、この学校にとどまって落ち着いている理由がなくなったことに気がつく。Temple 先生が去っていった日の夕方、Jane は Lowood の学校が校則やシステムに縛られた狭い世界で、もっと広い世界に羽ばたきたいと思って、窓の外を見る。

I went to my window, opened it, and looked out. There were the two wings of the building; there was the garden; there were the skirts of Lowood; there was the hilly horizon. My eye passed all other objects to rest on those most remote, the blue peaks. It was those I longed to surmount; all within their boundary of rock and heath seemed prison-ground, exile limits. I traced the white road winding round the base of one mountain, and vanishing in a gorge between two. How I longed to follow it farther! I recalled the time when I had

traveled that very road in a coach; I remembered descending that hill at twilight. An age seemed to have elapsed since the day which brought me first to Lowood, and I had never quitted it since. ... I had had no communication by letter, or message with the outer world. ... I tired of the routine of eight years in one afternoon. I desired liberty; for liberty I gasped; for liberty I uttered a prayer' (117)

Jane はこの Lowood が監獄のように思われ、自由を渴望した彼女は外の世界に出て行く決心をし、家庭教師の職を求める広告を出す。そして彼女はその職を見つけて Thronfield に行くが、そこで Rochester と運命的な出会いをするのである。

Thornfield で Adèle の家庭教師としての生活にある程度慣れて、平穏な生活を送るようになると、やはり彼女は平凡な生活に飽きて、館の屋根の上から外を見おろし、遠くにある野原や地平線の向こう側にある彼女には見えない活気に満ちた、変化のある繁華な世界に出て行って、多くの人々と交わり、色々な経験をすることにあこがれる。そして、また、Rochester と森の中で出会った後、郵便物を出して戻って来た時、彼女は同じ気持ちを抱いた。Thornfield の屋敷の敷居をまたぐことは「沈滞に戻ることに」"to return to stagnation" (147) であったし、「変化のない、静かな生活の目に見えない足かせ」"the viewless fetters of a uniform and too still existence" (147) を自分の本能へ、もう一度はめてしまうように思われた。

しかし、Rochester との出会いが、彼女を波乱に満ちた生活に投げ込んだのだった。Thornfield の近くの町に郵便物を出しに行く途中の森の中で、けたたましく暗闇の中を走ってくる馬の蹄の音がすると、彼がその馬に乗っていて、彼女の目の前で転ぶ。

As this horse approached, and as I watched for it to appear through the dusk, I remembered certain of Bessie's tales,

It was very near, but not yet in sight; when, in addition to the tramp, tramp, I heard a rush under the hedge, and close down by the

hazel stems glided a great dog, whose black and white colour made him a distinct object against the trees. ... The horse followed — a tall steed, and on its back a rider. The man, the human being, broke the spell at once. ... He passed, and went on; a few steps, and I turned; a sliding sound and an exclamation of 'What the deuce is to do now?' and a clattering tumble, arrested my attention. Man and horse were down...(143-144)

Rochester と Jane の出会いは妖精物語そのもののような神秘的な要素を強調していて、王子とシンデレラの物語のようである。時は寒い季節、深い静寂のただなかで月の明かりに照らされている薄暗闇の中の森の中で馬に乗った騎士が突然、現れるというロマンス物語の典型的なイメージが強調される。しかし、これまでのロマンティックな恋愛物語ではないことはすぐに知らされる。

He had a dark face, with stern features and a heavy brow; his eyes and gathered eyebrows looked ireful and thwarted just now; he was past youth, but had not reached middle age; perhaps he might be thirty-five. I felt no fear of him, and but little shyness. Had he been a handsome, heroic-looking young gentleman, I should not have dared to stand thus questioning him against his will, and offering my services unasked. I had hardly ever seen a handsome youth; never in my life spoken to one. I had a theoretical reverence and homage for beauty, elegance, gallantry, fascination; but had I met those qualities incarnate in masculine shape, I should have known instinctively that they neither had nor could have sympathy with anything in me, and should have shunned them as one would fire, lightning, or anything else that is bright but antipathetic. (145)

この二人の出会いの場面には単なるラブロマンスとは異なる点がいくつかあり、そこに色々な意味が込められている。まず、ロマンス物語では美青年の騎士、

もしくは王子様と、美しいお姫様の恋愛がそのテーマであるが、Rochester は中年の男性であり、しかもハンサムではないし、Jane も美しい女性ではない。Rochester 自身が、“you are not pretty any more than I am handsome” (163) と言っているように、それを認めている。しかし、それだけではなく、Jane はまた、ハンサムな男性には興味がなく、むしろ、彼がそうでなかったもので、助けようとしたのだった。彼がしかめっつらし、ごつごつとした感じだったことが彼女の気持ちを彼に向けさせたのだった。さらにこの場面にあるように男性が女性に助けってもらうというのは今までのラブロマンスには見られなかったことで、男女の役割が従来の物語と逆転している。この姿は後に盲目になって、Jane に手を引かれる Rochester の姿を予言しているといつてよい。

その二人が Thornfield で交わす対話もそっけなく、ぶっきらぼうで、通常の男女の会話ではない。彼が関わったこれまでの女性はその容姿について、心とは裏腹にほめまくったが、Jane は彼が、「私は美男子ですか。」とたずねると「いいえ」とつい口から滑り出してしまう。彼は今までの女性たちと Jane との対照に衝撃を受け、彼女の純粹さ、率直さに心打たれて、次第に彼女に惹かれていく。彼は魂がない、ただ美しいだけの女性には何の魅力も感じないが、Jane のような意志の強い火のような魂を持った女性に惹かれると告白している。このように Jane がラブロマンスのヒロインになるような女性でないことは彼女の容姿や性格、言動などから考えると容易にわかる。つまり、彼女の反ヒロイン的資質は、美しくないこと、反抗的で、従順ではないこと、自分の意見をはっきり言うことなどである。

男性作家が描いた理想の女性は常に清らかな天使であり、当然、男性に従順で、逆らわない女性、つまり、自我を持たぬ女性である。若い女性の美德は従順と慎み深さと無私であり、妻は「家庭の天使」として、夫に従順に仕えるべきだと考えた。しかし、従順で沈黙を守ることを拒む女性は妖怪などの恐ろしい存在になる。男性が行なえば、有意義と思われる行動を女性がすると、その女性は天使とは対極である妖怪の特性を持っているとされた。つまり、自分自身の利益のために何かを主張したり、意志の強さや攻撃性などを表わしたりすると妖怪と呼ばれた。こうして、天使と妖怪という極端な二極分化が文学から生まれ、その二つが女性の主なイメージとなり、天使と妖怪のイメージは男性

による文学すべてにわたって表れている。そこで女性作家はとりわけ、男性作家が女性に対して表した天使と妖怪という極端に分化したイメージを理解し、さらにそれを超克していかなければならない¹⁰⁾。この小説でも Rochester は Jane のことを天使とか妖精と言ったり、自分に従わないときには彼女を魔女とか子鬼とか化け物とか言う。Rochester は Jane と婚約すると彼女を天使と呼ぶ。

‘Ten years since, I flew through Europe half mad: with disgust, hate, and rage as my companions: now I shall revisit it healed and cleansed, with a very angel as my comforter.’

I laughed at him as he said this. ‘I am not an angel,’ I asserted; ‘and I will not be one till I die: I will be myself. Mr Rochester, you must neither expect nor exact anything celestial of me—for you will not get it, any more than I shall get it of you: which I do not at all anticipate’ (288)

彼は結婚したらヨーロッパじゅうを彼女と旅するのに「私は天使とともに行く」と彼が言うが、自分は天使ではなく、普通の人間であり、これからも死ぬまで天使になるつもりはないし、天使のような理想的な人間ではないという。

Rochester は Jane を天使と呼ぶ一方で、彼女を妖精と呼んだり、また Jane が彼に反抗したり、たてついたりしたときには「いまいましい木偶人形」(“provoking puppet”) (302) とか、「意地悪の小人」(“malicious elf”) (302), 「鬼つ子」(“sprite”), 「取り替えっ子」(“changeling”) (302), 「魔女」(“witch”) (308) とか呼んだりする。そして。気の狂った妻の Bertha のことを彼は「悪魔」(“demon”) (322) とか「化け物」のように言う。このように男性に従順な女性は天使であり、男性に背く女性は妖怪とか悪魔とか、化け物などと呼ばれる。同じ女性でも男性の都合で、その時によって呼び方を変えていて、Rochester が天使と呼んでいた Jane も彼にたてつく態度をとれば、妖怪に近い呼び名で呼ばれた。

Rochester が彼女の強固の意志を檻に入った囚人に例えることで彼女の性格

が従来の従順でおとなしいヒロインとは違うことが強調されている。

‘I could bend her with my finger and thumb; and what good would it do if I bent, if I uptore, if I crushed her? Consider that eye: consider the resolute, wild, free thing looking out of it, defying me, with more than courage — with a stern triumph. Whatever I do with its cage, I cannot get at it — the savage, beautiful creature! If I tear, if I rend the slight prison, my outrage will only let the captive loose. Conqueror I might be of the house; but the inmate would escape to heaven before I could call myself possessor of its clay dwelling-place. And it is you, spirit — with will and energy, and virtue and purity — that I want: not alone you brittle frame. (344-345)

檻を壊してもその中の囚人を捕まえないのと同じ様に彼女の体はか弱くともその中に収まっている魂を捕まえることはできないと Rochester は自分の思い通りにならない Jane のことを言う。

自分の考え、意見をはっきり表明する彼女は社会的身分や性の違いによって、人間を不平等に扱うことに断固反対し、対等に扱うように主張する。Jane が男女平等だけではなく、社会における平等というもっと広い視野を持っていたことは次の有名な箇所からわかる。

It is in vain to say human beings ought to be satisfied with tranquility: they must have action; and they will make it if they cannot find it. Millions are condemned to a stiller doom than mine, and millions are in silent revolt against their lot. Nobody knows how many rebellions besides political rebellions ferment in the masses of life which people earth. Women are supposed to be very calm generally: but women feel just as men feel; they need exercise for their faculties, and a field for their efforts as much as their brothers do; they suffer from too rigid a restraint, too absolute a stagnation,

precisely as men would suffer; and it is narrow-minded in their more privileged fellow-creatures to say that they ought to confine themselves to making puddings and knitting stockings, to playing on the piano and embroidering bags. It is thoughtless to condemn them, or laugh at them, if they seek to do more or learn more than custom has pronounced necessary for their sex. (141)

これは Jane が階級社会における不平等を認識していることを暗にほのめかして、富める者と貧しき者との隔たり、また、弱者の反乱の意味をも含ませた階級社会への抗議と取れる。また男女の役割分化が進む当時のヴィクトリア朝社会の慣習への抗議は Mary Wollstonecraft (1759-97) が *A Vindication of the Rights of Woman* 『女性の権利の擁護』(1792)の中で主張した考えをそのまま表わしたものである。これは Jane が小説の中で言っているというよりは著者の Charlotte Brontë が自分自身の考えを小説の形を借りて主張したものと考えてよい。

Jane は Rochester と対等な人間であるということを度々表明している。Rochester が Ingram と結婚すると聞いて、次のように言う。

‘Do you think I can stay to become nothing to you? Do you think I am an automaton? — a machine without feelings? and can bear to have my morsel of bread snatched from my lips, and my drop of living water dashed from my cup? Do you think, because I am poor, obscure, plain, and little, I am soulless and heartless? You think wrong! — I have as much soul as you — and full as much heart! And if God had gifted me with some beauty and much wealth, I should have made it as hard for you to leave me, as it is now for me to leave you. I am not talking to you now through the medium of custom, conventionalities, nor even of mortal flesh: it is my spirit that addresses your spirit; just as if both had passed through the grave, and we stood at God’s feet, equal — as we are!’ (281)

Jane は貧しく、身分も低く、不器量な女であっても、身分の高い、富裕な彼とは神の御前では平等であると高らかに主張している。そして 身分が高く美しいけれど、人間的に価値のない女性である Ingram と結婚する彼を軽蔑するとさえ彼女は言い切る。

それに対して Rochester の方も Jane を対等な人間として扱う姿勢を表明している。身分の違う Rochester と Jane は平等であるという所は単に男女が平等であるというフェミニズム的考えが表われているだけではなく、階級社会に反逆する政治的に不穏な革命意識を感じとり、当時の批評家たちは「危険な書物」と評したのである。Rochester と Jane が実際に対等であるということはその後になってわかってくる。Bertha が放火して、彼の部屋が燃えた時に Jane は彼を助け出したし、Bertha の弟が彼女に襲われて怪我をした時にも Jane に手当てをしてもらうなど Jane の助けがなければ、Rochester は苦境を切り抜けられなかったのである。

物を「書く」ということは男性のすることであるというのが社会の慣習であった時代は女性が自分の意見を主張することはあるまじきこととされていて、女性が何かを「語る」ことは女性のすることではないというのが一般的社会通念だった。従って、女性の方から男性に対して愛を告白するなどということはあるまじきことであった。しかし、Jane は Rochester が Ingram と結婚するということを聞いて、“The vehemence of emotion, stirred by grief and love within me, was claiming mastery, and struggling for full sway, and asserting a right to predominate, to overcome, to live, rise, and reign at last: yes — and to speak.” (280-281) とあるように高まる感情の中で彼女は「語る権利」(“a right ... to speak”)を主張して、自分が彼を愛していることを告白する。女性の方から愛を告白するというのはこれまでにないラブロマンスの型であり、*Jane Eyre* という小説の新しさでもあった。

Jane は Rochester が Ingram と結婚するのを聞いて嫉妬しないし、Ingram はそれに値しない人間であると見抜いている。Ingram は美しい容姿、高貴な身分を所有し、芸にすぐれているが、精神は貧しく、心は干からびて、自分の意見は持たない、そして真摯な魂を所有しない、価値のない人間だと Jane は思う。Jane はそのことを知っていて、ただ打算のために結婚しようと

している Rochester を軽蔑すると面と向かって彼に言う。結局、Jane は彼が自分を愛していることを知り、二人は結婚することを約束する。Jane が Ingram に勝ったのは Ingram の地位、名誉、富などの物質的価値を重んじる価値観に対して、Jane の男女の絆として何よりも愛情の一致を重視する精神的価値観が打ち勝ったことである。これはヴィクトリア社会の慣習への真っ向からの反逆だったと言える。

6. Jane Eyre の自立

Jane は Rochester と結婚することになるが、Jane の新たな試練がこれから始まる。それは彼女が Rochester や St John という二人の家父長によって自由を奪われ、彼らに服従し、従属することを強いられるからである。Jane は自由を渴望し、自立する人生を望んだはずなのに、Rochester と婚約した途端に彼は彼女を自分の思うままにしようとし、自分の奴隷のように束縛しようとして、“when once I have fairly seized you, to have and to hold, I’ll just — figuratively speaking — attach you to a chain like this’ (299)” と言って、彼女をいわば、鎖で自分に縛りつけようとした。そして彼女を高価な宝石や洋服で飾り立てて、美しく着飾らせた女奴隷のように彼の「奴隷」にしようとした。また、彼は自分のかつての情婦たちをののしった時、自分もやがて同じ運命になるのではないかと不安になる。抑圧された女性を表わすのに鳥の比喩がしばしば文学においては使われるが、Jane も “I am no bird; and no net ensnares me; I am a free human being with an independent will, which I now exert to leave you.” (282) というように自分のことを網に掛けられる鳥ではないと言う。夫への物質的な依存が精神的な依存となり、結局、自己の主体性が喪失してしまうことを恐れ、Rochester と真の意味で対等になるためには経済的にも対等でなくてはならないと考えた。そこで彼女は結婚してからでも経済的に自立できるために Adèle の家庭教師を続けて、自分の生活費は自分で稼ぐと言うし、また伯父の遺産をもらいたいという手紙も伯父に出す。このように彼女は男性に隷属していわば、「自己放棄」することは我慢できず、経済的にも精神的にも自立することを望んだのだった。

Rochester には気の狂った妻がいることがわかったにもかかわらず、彼は彼女に自分の所にとどまるように懇願したが、それは結婚という形ではなく、彼の愛人になるということを意味した。愛する Rochester と別れるか、愛人としてとどまるかの二者択一しかとる道がない彼女は Rochester の懇願に心が引き裂かれそうになるが、結局、愛を捨てても道徳にかなう道を取り、振り払うように彼のものを去っていく。

Jane がその後に出会った男性は牧師の St John であり、彼は Jane にインドに布教にいくのに妻としてついて来て欲しいとプロポーズする。しかし、John も「家父長」として彼女を束縛し、自分にすべて服従することを要求する。John は厳しい人で彼女に命令して自分の思うとおりにさせようとするので、やはり、彼女は彼の奴隷になりたくないと思う。彼の主義主張は高潔であるが、冷たい氷のような「柱」であり、偽善者の Brocklehurst と同じ「家父長制度の柱」であった。一時、彼女は John の言うとおりにして、彼の妻になることを承諾しようと思ったが、しかし、そうすると Rochester との時と同じ様に自分が押さえられてしまい、自分を押し殺してしまうことになることに気がついた。Rochester は Jane を「火の奴隷」にしようとしたが、John は彼女を「主義という鉄の帷子」の中に閉じ込めたいと考えていたのである。彼女は Rochester の不思議な声を聞いた後、John のもとから逃げて、再び Rochester のもとに帰ってくる。

Rochester のもとに戻ってくると、Bertha の放火によって、妻が亡くなり、彼も目が見えず、片腕のない人間になったのを知った。しかし、富も妻も失い、体も不自由になった彼と結婚することは彼女にとっては、この上なく、望ましいことだった。

There was no harassing restrain, no repressing of glee and vivacity with him; for with him I was at perfect ease, because I knew I suited him; all I said or did seemed either to console or revive him. Delightful consciousness! It brought to life and light my whole nature: in his presence I thoroughly lived; and he lived in mine.
(461)

この結婚によって彼の不自由な身を Jane が補い、彼の杖となることが出来るし、彼女は何の拘束も感じないで自由に、のびのびといられたのである。この時は彼女には伯父の遺産が入っていたので、経済的にも自立できたし、精神的にも自立できたのである。というのは彼女は精神的にも一方的に彼に依存するだけではなく、彼を精神的にも支えるという生き方をすることが出来たからである。彼女は彼が独立していた時よりも役に立っていると感じ、自分が犠牲になっているという気持ちはまったくなく、「私自身の女主人」として、最高に幸せな結婚生活を送ることになる。

終わりに

Jane Eyre 以前のヒロインたちのほとんどはまず、美しいこと、金持ちであるか身分が高いこと、性格が優しく、素直であるという三つの条件のうち、少なくともひとつが当てはまるような女性であった。逆にいうと、この三つの条件のうち、どれかひとつの条件が満足していないと、文学のヒロインにはなれないというのが一般的な考えだった。これはつまり、ヒロインは男性から見て、望ましい女性、男性から可愛がられるような女性でなければならなかったことを意味しているが、*Jane Eyre* はこのどの条件も満たしていなかった。彼女は気が強く、自分の意見をはっきり言う自立心の強い女性で、自分の人生を自分で切り開いていこうとした女性である。子どもの頃から、大人たちに反逆し、また、社会に出ても世の中の慣習に反逆して、身分の違う男性に対等に自分の主張をし、また自分から男性に愛を告白するなどということをしたのである。その意味で *Jane Eyre* のヒロインは文学において初めて、男女同権を主張した人物と言ってよい。美人でなくとも、従順でなくとも、貧しく、身分が低くても、人を愛し、愛される権利があることを示した最初のヒロインであると言える。

* 本稿は2002年11月9日、城西大学女子短期大学部主催の女性学講座「時代に反逆した女」を基にしたものである。

<注>

- 1) Elaine Showalter, *A Literature of Their Own* 川本静子他訳（みすず書房、1993年）p.14. Showalter は女性作家を三段階に分けていて、第一段階を「女性的な」（Feminine）段階、第二段階を「フェミニスト」Feminist 段階、第三段階を「女」（Female）段階と呼んでいる。時代的に必ずしも明確に区分されないが、一応の目安として、第一段階は1840年代から1880年まで、第二段階を1880年から1920年まで、第三段階を1920年代から今日まで、と区分している。p.9. 参照。
- 2) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. 『屋根裏の狂女』山田晴子、藺田美和子共訳（朝日出版社、1988）、p.2.
- 3) この点に関しては、拙論「W. M. サッカレーとシャーロット・ブロンテとの交流」『日本女子大学 英米文学研究』、35号、pp.126-127. (2000)
- 4) Charlotte Brontë, *Jane Eyre*, rpt. of 1847 (London: Penguin Books, 1985), p.45. 以後、この作品からの引用についてはページ数を引用箇所の後に付す。
- 5) 山本紀美子、「『ジェイン・エア』—ジェインの倫理的意識—」、『ヴィクトリア朝の小説：女性と結婚』内田能嗣編（英宝社、1999）、p.17.
- 6) 青山誠子、『ブロンテ姉妹』、（清水書院、1994）、p.160.
- 7) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, p.298.
- 8) Elaine Showalter, *The Female Malady: Women, Madness and English Culture, 1830-1980* (New York: Pantheon Books, 1985) pp.52-60.
- 9) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, p.314.
- 10) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, pp.25-26.